

# 教 名 聞

第 118 号  
(発行日)

2020 年 7 月 1 日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒 6638113 西宮市  
甲子園口 2 丁目 7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.c  
onet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

## 真宗門徒の生活

仏教徒の生活は修行の生

活といえましよう。修行と

は行を修めるといふことで

まいませぬ。讃嘆供養とはお仏壇の掃

す。どういふ行を修めるか

除をしたりお仏飯をお供え

はその人が何宗に属してい

したりお香を焚いたり花で

るかによって違いがありま

かざったりすることです。

す。浄土真宗の門徒であれ

これらを毎日行うのが真

ば、五正 行を日々修める

宗門徒の生活です。これは

生活になります。五正行と

多少努力しなければいけま

は、読誦・観察・礼拝・称

せんから「お勤め」あるい

名・讃嘆供養という五つの

は「勤行」と申します。お

行いです。

仏壇(お内仏)はこういう

読誦とは正信偈や阿弥陀

宗教生活を私がするために

経や偈文を仏前で唱えるこ

あるものです。お仏壇は家

とです。これにはテープや

庭の中にあるお寺と同じ意

CD が販売されています。

味です。単に先祖を祀る道

### 《 二〇一九年度東本願寺基金御懇志報告 》

#### 懇志者名 (敬称略)

青木宏克 赤股一夫 浅野真由美 勘進 石川紀美子 稲田富恵 井上守 今村光  
志 岩谷龍 石田君代 岩田能一 植田節美 改発正浩 小畑住子 角谷節代 香川郁  
夫 加藤忠 鹿野良子 萱島聖志 川端靖雄 喜多真澄 窪ナル子 小西充子 児玉慶  
子 佐藤孝幸 下野誠二 下野知恵子 城越香織 白石千鶴子 寿賀晴剛 関有江 谷  
村往世 津田衛一郎 土居令子 長井一江 中川政二 中野タカ子 中村暢明 中村  
穂積 中村幹夫 七村文子 西山恭夫 西塚祥子 能登昇志 野原佳子 長谷川満 泰  
京子 濱秀子 林久司 平田幸子 原崎佳水 福井靖弘 福村義明 前田ふくの 町百  
合子 宮伊勢子 三浦一浩 三宅真知子 宮野勲 宮野道子 室塚良治 村瀬松三 森  
野茂治 山下東洋栄 山科瞳 山下征洋 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ蘭 陸枝 山下悦  
子。

合計 二二一〇〇〇円

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に  
納めさせて頂き戴きます。有難うございました。 合掌

合掌

尊)を拝むことです。

この五正 行の中で一番

とアマダ仏の御名を称える

大事な行いはお念仏を称え

ことです。数は決まってい

ることで。このお念仏は

せん。どれだけ称えてもか

助ける」と誓ってくださる

とこのの、アマダ仏によつて私たちに与えてくださる行(ぎょう)だからです。ただし、この誓いは「称えたら助ける」といわれるのではありませぬ。「汝をそのままなりでまるまる引き受ける」といふアマダ仏の大いなる慈悲のおはたらきを「我が名を称えるばかりで助ける」と表されているのです。

こうして毎日の生活が行われませんが、称えているお念仏のお心を詳しく知るには真宗の教えをよく聞く必要があります。そのために真宗のお寺があります。月に一度はお寺参りをして教えを聞くことが大事になります。少なくとも真宗のお

活といえましよう。修行と

寺の第一の存在意義は仏教の教えが説かれる場所という意味です。それがなかつたらそれこそ単なる街の風景でしかありません。

は行を修めるといふことで

ではこういう宗教生活をするとどうなるかということですが、アマダ仏(量りなきあたたかいのちと光)にであい、アマダ仏に支えられ、アマダ仏と共に生き、

す。どういふ行を修めるか

アマダ仏の領域に生まれゆく、という人生の意味と方向が与えられます。

はその人が何宗に属してい

こういう宗教生活に對して「そんなことは私には必要ない。お金と健康と娯楽

るかによって違いがありま

がなければそれで十分だ」という生き方もあります。ど

す。浄土真宗の門徒であれ

ういう生活をするかはその人の選びにかかっています。

ば、五正 行を日々修める

ます。

# 真宗の最終根拠

何度もこの寺報で申して

いますが、アミダ仏の救いは佛説無量寿経に説かれて  
いる第十八念仏往生の願に  
表されています。念仏往生  
の願は「乃至十念 若不生者  
不取正覚」の願文にその救  
いが表されています。「十声  
なりとも念仏もうすもの、  
もし浄土に生まれることが  
できないようなら、我も仏  
にはならない」という如来  
法蔵様の誓いです。いわゆ  
る、「我が名を称えるばかり  
で助ける」との仰せです。「そ  
のままなりで引き受ける」  
の仰せです。

「助ける」というのは、  
私の罪の深きにも妨げられ  
ず、私の妄念妄想がいか  
に盛んであってもそれに妨  
げられず、死に行く我が身  
を、量りないのちに撰めとつ  
てくださることです。

ではこの救いは何を根拠  
にしてそのように説かれて

いるのでしょうか。

これについてよく言われ  
ることは、  
問「この南無阿弥陀仏が（そ  
のままなりで助ける」と言  
われますが、それは真実で  
すか」  
答「真実です」  
問「なぜ真実ですか」  
答「悟りを開かれた仏が仰  
せられるからです」  
問「どこに仰せられていま  
すか」  
答「佛説無量寿経に説かれ  
ています」

ということ、南無阿弥陀  
仏の救いがまことであると  
いうことの根拠は「釈迦仏  
の仰せだから」「経典に説か  
れているから」といわれる  
ことが多いのです。

いわゆるウソをつかぬ仏  
の仰せだからといわれ、ま  
た「仏の無分別智のさと  
り智慧から表れた言葉だか

ら」と言われるのです。覚  
りを開かれた仏陀釈尊の言  
葉だから、間違いがないの  
だと。

たしかにそれで間違いが  
ないのでありましょう。た  
だ、こういう立場だけ言わ  
れるのなら「聖典主義」  
「聖教主義」といわれても仕  
方ありません。

これは真宗だけのことで  
はありません。その救いは  
何を根拠にしているのかを  
問われた時に、「聖書に説か  
れているから」とか「コー  
ランに説かれているから」  
というなら、おなじく聖典  
主義、聖書主義といえまし  
よう。「聖書やコーランは神  
が預言者を介して述べた言  
葉であるからまことである」  
というのです。

真宗もアミダ仏の救いは  
悟りを開かれた仏陀釈尊の  
言葉だから間違いがないと  
いうことで、多くの場合そ  
のように言われてきました。

では本願の救いの言葉は  
経典に説かれているとして  
も、そのように救いが説か  
れる最終的な根拠はないの

でしょうか。それはやはり  
「仏陀が説かれたから」と  
いうのが救いの依って立つ  
最終根拠でありましょうか。

仏陀釈尊は真理を悟って  
真理を説いたお方ですから  
釈尊の言葉は権威があり信  
頼がおけるのです。そもそ  
も仏陀という言葉自体が「真  
理を悟ったお方」という意  
味です。

ですから仏陀が説いたか  
ら真理ではなく、真理  
を説いたから仏陀なのです。  
そこで仏説無量寿経は仏陀  
が説かれた教説ですから、  
無量寿経のアミダ仏の救い  
の最終根拠は仏説というよ  
り、仏陀が覚った真理その  
ものであるはずです。

だから仏陀の言葉の背景  
にあり、仏陀の言葉が間違  
いの無い道理として信頼を  
置くことができるのは、仏  
陀の悟られた真理にありま  
す。

仏陀の覚られた真理は普  
遍的根源的な真理として長  
い歴史のなかで証しされて  
きました。この真理はさま

ざまな思想や宗教の違いを  
超えた普遍的な道理です  
から「真理」の名にふさわ  
しいと言われています。

そこで仏陀が覚られた真  
理の内容はどのようなもの  
であるかということにつ  
いて仏教の歴史の中でもい  
ろいろに説かれてきました。  
すなわち、縁起の法・諸法無  
我・無自性空・方法唯識、  
あるいは自他一如であり生  
死一如の真理などとさまざ  
まに表現されてきました。

ということは真理は古来、  
色や形を超え、言葉で限定  
できないものと言われてい  
ます。

その言葉で限定できない  
真理を言葉で表現して、言  
葉を超えた真理に目覚めさ  
せていく、これが仏陀の説  
法であり、それを説かれた  
のが経典なのです。もとも  
と言葉で言い尽くせない真  
理を言葉で表現することに  
よって衆生を覚らせていく、  
そういうことができるお方  
が仏陀なのです。

さて、浄土真宗では弥陀  
の本願が救いの法として無

量寿経に説かれてきました。ですから弥陀の本願は弥陀のさとの真理から表れてきたということになります。そうすると、無量寿経に説かれた弥陀の本願のよりどころとなる普遍的な真理は、

そういうものでしょうか。それについて、親鸞聖人の書かれた著述の中に「真理」という言葉を探してみますと、二個所あります。

一・「難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なり」(『教行証文類』)

一・「撰取不捨の真理、超捷易往の教勅、聞思して遅慮することなかれ」(『浄土文類聚鈔』)

です。この内、『浄土文類聚鈔』に出て来る「撰取不捨の真理」、これがはなはだ大事であると思います。

この撰取不捨の真理こそ、仏説無量寿経が弥陀釈尊によって説かれた背景にある道理であると伺います。それは当然自他一如・生死一如などと表現される真理表現とも内容は重なるもので

すが、「撰取不捨の真理」がアミダ仏の救いが説かれる根拠としての真理表現としてふさわしいと思います。

そこで真宗ではアミダ仏のことを「ご和讃」には、「十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし撰取してすてざれば阿弥陀となづけたてまつる」(小経和讃)

とあって、アミダ仏とは衆生を撰取して捨てない働きを云うのだとたえられています。

また弥陀の本願第十八願を、「撰取不捨の願」(歎異抄)といい、また南無阿弥陀仏の名号のことを、

「撰取不捨の真言」(『教行証文類』総序)

と仰せになっておられます。そして信心が私たちに起

るのも、正定聚に住するのにも、無上覚の仏になるのも、その根拠は撰取不捨によつてであることを、宗祖の『ご消息』に、

「如来の誓願を信ずる心のさだまる時と申すは、撰取

不捨の利益にあずかるゆえに、不退の位にさだまると御こころえ候うべし。真実信心さだまると申すも、金剛信心のさだまると申すも、

撰取不捨のゆえに申すなり。さればこそ、無上覚にいたるべき心のおこると申すなり」

とあります。またなぜ無上覚である仏になることができるかというその理由を宗祖の「夢告和讃」に、

「弥陀の本願信ずべし本願信ずるひとはみな撰取不捨の利益にて無上覚をばさとるなり」と詠っておられます。

〈撰取不捨〉の言葉こそ、真宗の教えのキーワードであり、撰取不捨の真理こそ浄土真宗の救済の根拠となる真理であるといえましよう。

では撰取不捨とはどういう内容でしょうか。

宗祖はアミダ仏と人(あるいは物)の切っても切れない関係を「撰取不捨の真理」といわれます。アミダ仏は衆生に対して撰取不捨

の救いとして働いてくださっています。

このアミダの衆生を撰取して捨てない働きは衆生にとって普遍的根源的な真理のはたらきですが、その内容を現代の論理で表現すれば「(アミダと衆生は)不可分・不可同・不可逆の関係」であると表現すると分かりやすいと思います。(私はこの言葉を滝沢克己から学んだ)

アミダとは梵語のアミターアユス(寿命無量)でありアミターアーバ(光明無量)が元の言葉であって、

寿命無量を本体とし、光明無量をその用きであると言われています。まさにのちばかりなく、光かぎりなき真実の用き、いわば真の實在であります。

万物はこのアミダのいのちに於てあり、アミダのいのちの中にあり、アミダのいのちに包まれており、アミダのいのちの上に置かれている。

人は万物の中の一つの小さな物です。いわゆる個物

です。人はアミダのいのちに於いて成立している。アミダのいのちを離れてはなく、アミダのいのちの外には無いと言えます。

人のいのち(身心)はかぎりない無相無形のアミダのいのちが一つの形を取った物であります。人は、一つの物であつて有限であり、生まれて死すべきいのちです。有限であり一つの物であるということは、いつでも今だけしかなく、このこという場所においてしか存在し得ない。

しかも物として物質であるが、しかし人は万物の中で物質であると共に意識をもった存在です。

意識があるということは思惟し判断し選択する、いわば行為する自由があります。人はいつでも今ここに置かれている一個の物(身体)であるとともに判断し行為する存在です。

アミダのいのちに於いてのみ成立している人のいのちはアミダのいのちと不可

分です。アミダは人を置いてある場所であり、人は今ここに限定された場所に置かれているものであつてアミダと同じではありません。それゆえアミダと人は〈不可同〉です。

繰り返しますと、アミダと人の摂取不捨の関係は不変的な関係であつて、アミダは人と〈不可分〉です。しかしながらアミダと人は決して同一ではない、〈不可同〉です。

そしていつでも人は今しかおれず、ここを離れることができず、どう判断しどう行為するかがいつも問われています。自由のある存在です。自由があるということは自分の行いに責任があり、どう考え、どう判断し、何を選ぶかにおいて正邪善悪が問われている存在です。ことにアミダはまたご自身の働きを万物に表現しようとする用らきであり、人はアミダの用らきを受けて、それを表現することを求められている存在でもありません。この関係は逆にはなりません。ただ人はアミダの

用きに対してどのように応答するかが一瞬一瞬問われている。そこに人の自由があるとともに責任があります。ここに人の行いの正邪善悪が現れてくるのです。

アミダと人との摂取不捨の真理はこういう内容をもつた真理であると伺うので

す。しかし人は摂取不捨の真理の中にありながらこれに気づかずこれを見失つていきます。それが迷いであります。それゆえ摂取不捨の真理を無視し、逆らい、苦悩し、悪業を重ねて流転してきたのです。

この摂取不捨の関係に気づき、アミダ仏の働きにそつて生きるべく生き、死す時は個物(身心)としての殻を脱却してアミダ仏と一つになされる。それが浄土に生まれることであり大涅槃の世界に入ることだと仏陀は仰せられるのでありましよう。

摂取不捨の真理は人々の人生の光となり真実の智慧

となつて働き、どこまでも衆生の一人一人を摂取取つてアミダ仏のふところ住まいをさせ、遂にアミダ仏と一つにしてくださる大いなる慈悲の用らきです。

そういう私たち一人一人を摂取して捨てない用らきとして喚びかけてくださるのが南無阿弥陀仏の名号であります。この名号のことを宗祖は「摂取不捨の真言」と仰せられています。まことにこれこそ真実の言葉であつて、この言葉によって私たちは摂取不捨の真理にであうことができます。

南無阿弥陀仏は「汝を摂取して捨てない、引き受ける」との仰せとして一人一人に常に喚びかけてくださっています。

この摂取不捨の真言に喚びさまされて、「ああアミダ仏は私と共にいてくださる」「私を摂取して浄土に至らせてくださる」「私の罪業を引き受けてくださる」と知らされるのです。

アミダ仏は私の生の土台

となつてくださっている。私の行いや思いや煩惱によつてこわれもしないし、なくなりもしない。私に先立つて私の存在の基礎になつてくださっている。

私はこの上において生き、この上で考え、活動し、人と交わり、私の一生を送らせてくださる。寝ている時も起きている時も、嬉しい時も悲しい時も、人と交わっている時も孤独な時も、健康な時も病める時も、若い時も老いたる時も、生の時も死の時も、一瞬も離れず摂取しておられるのです。

このあたたかい有り難い摂取不捨のいのちに気がつくくと、この真理にそつて生きようと願わざるを得なくなる。この大いなる恵みの真理を無視しこれに背くから、人と人生そして世界のあり方がゆがんでくるのでありましよう。

ところがどういうわけか、人はこの摂取不捨の真理に生まれつき盲目です。それゆえ苦悩の人生となり、憂苦の人生となり、世界の濁

りを生む大きな原因を作っているのです。

このような人(衆生)に、摂取不捨の真理に目覚めようとして、摂取不捨の真理そのものが人の世の初めから実は働いておられるのです。それをアミダの光明というのです。

アミダの無量の光明は、人に摂取不捨の真理に目覚ましめようとして、摂取不捨の言葉(真言)となつて喚びかけてくださっている。それが南無阿弥陀仏の言葉です。「汝を摂取取つてやまないアミダがここにあなたとともにいる、引き受けています」と喚びかけてくださっているのです。

お念仏申しつつ、このアミダの喚びかけを聞いて聞いていくところに、時いたつて「ああアミダ様が私と共にいてくださる。アミダ仏は私の行いの善し悪しを問われず、私の存在そのものをまるごと抱き取つてくださっていた」と気がつかされるのです。ここに真宗の救いがあります。(了)